



TITLE:

<社会人エッセイ> 「京都で学ぶ、  
善意の倍返し」

AUTHOR(S):

柳, 恩智

---

CITATION:

柳, 恩智. <社会人エッセイ> 「京都で学ぶ、善意の倍返し」. 公共空間  
2014, 12: 54-56

ISSUE DATE:

2014

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/197677>

RIGHT:

本誌掲載の写真・イラスト・記事の無断転載・二次利用はお控え下さい.

## 【社会人エッセイ】

## 「京都で学ぶ、善意の倍返し」

京都大学公共政策大学院八期生 柳 恩智

「京都大学に入学することになりました」という言葉を職場に伝えてすっきりした気持ちで、荷物を整理し、韓国を出発したことがもう去年の四月一日のことです。韓国で公務員として働きながら、京都大学の入学試験に合格したことが二〇一二年の秋の頃であり、二〇一三年から二年間の予定で京都大学公共政策大学院にて勉強しています。

私が勤務していた韓国の金融委員会は、日本の金融庁と言える所ですが、厳密には違いがあります。日本の金融庁は銀行などに対して直接調査する権限を持っています。韓国の場合は金融監督院という特殊法人が銀行等を調査し、政府組織としての金融委員会がその金融監督院を指導と監督し、金融政策を遂行する形になっています。つまり、独立的な機関である金融監督院が市場を調査して不正行為等が発生する場合、金融委員会にその件を送り、金融委員会が制裁措置等を取る仕組み

みになっています。

私が初めて公務員になった時が二〇〇八年の春でした。公務員になりたてで、まともに一人では仕事が多まならない中で、同年の秋にリーマン・ブラザーズの

破綻による世界的な金融危機が発生しました。その直後は、仕事において想像し得ないことが毎日のように起こりました。もちろん韓国は、一九九七年にアジア通貨危機を経験したことがあったため、私のような素人ではなく、危機に強いベテランの先輩たちがうまく事態に対処した結果、米国に比べると、韓国などのアジア国は比較的に金融危機の被害が少なく、思ったより危機をうまく收拾することができました。

しかし、その経験は私にとって金融の役割について再度考え直すきっかけになったと感じています。金融が实体经济を円滑にし、経済成長を促す役割から逸脱して、实体经济を歪曲させることになったのではないか。高いインセンティブ（報奨）を取るために、複雑な派生商品を作って販売した大型金融機関の利潤追求活動が引き起こす金融の混乱に対し、政府は多数の金融消費者を保護するために何

ができるか。これらの問いに対する答えは簡単ではなく、多くの試行錯誤を重ねるかもしれません。

今回の金融危機の結果、住宅担保融資リスク管理の強化と金融会社の通貨の健全性向上など、金融市場に対するリスクの管理努力を強化は勿論のこと、金融の利用環境がさらに悪化した信用力の低い庶民層のために信用回復支援する金融事業推進などの自活支援にも力を注ぎました。そのために、韓国では、金融消費者保護に向けて金融消費者保護院（仮称）を設立するなどの内容を含める金融消費者保護に関する法律が国会に提案され、私はその一連の流れを見ながら自分なりに公共の立場から、もっと勉強したいと思いました。

そして、今は京都大学公共政策大学院の授業を通じて、公共の意味を再認識することをはじめとし、自分の考えの基礎を固められる有意義な時間を過ごしています。最近、金融消費者保護とともに、マイクロクレジット事業などの役割についても研究しています。具体的には、庶民などの金融疎外階層に対する効果的な金融サービス提供し、これが雇用と所得の増加や経済成長をもたらし、社会の安定化に寄与するのではないかと研究を深めているところです。

今、一年間の学生生活を振り返ってみると、最初の新たな勉強ができる喜びに加えて、社会人ではなく再び学生の身分に変わることに、日本という新しい国の生活を満喫することにも大きな喜びを感じていました。しかし、それ以上に印象的なのは、入学後の入国管理局や不動産屋などの様々な日常的なやり取りなどの、不得意な日本語能力を挽回するための小さな戦いの毎日のことでした。また、日本の高い交通費を考えながら涙を浮かべて、慣れない自転車に乗って通学すると、道に転がることを数十回、今では私の足より頼もしい自転車私の宝物一号になっています。

この精一杯の日々の中、偶然に「半澤直樹」というドラマを見ました。内容が日本の銀行関連の話であると聞いて、より一層興味を持って熱心に見るようになりました。ドラマの内容は一九九〇年代の日本経済のバブルがはじけた頃に、大手銀行に入社した主人公が銀行内の不条理な業務形態、派閥争い、権謀術数などに対抗する姿を描いたもので、彼の「やられたらやり返す」、「倍返しだ」という言葉が脳裏に焼き付きました。「倍返し」という言葉はドラマの最後には、倍ではなく、十倍あるいは百倍に強度を強めていきました。



公共の学生たちと議論する様子。筆者は写真中央。

このドラマを見て二つの考えがふつと頭をよぎりました。その一つは金融の役割についてです。ドラマは、初場面から銀行のあり方について疑問を投げかけました。技術力は優れているが、予期せぬ資金難に苦しむ中小企業の社長が、主人公の前で頭を下げる反面、他の銀行員らはただお金を回収するのに奔走し、大手企業の社長らと結託して不当な融資

を犯していました。それにもかかわらず主人公は、銀行は資金が必要な人たちのためにあるという役割を果たさなければならないという信念で、周りの不条理に立ち向かっていきました。主人公の父に対する回想シーンで、主人公の父が「この軽くて丈夫なねじが日本を支えている」という言葉を伝え、私はこの場面がドラマ全体を象徴していると思っています。私はこのドラマを見て、銀行は資金を必要などころに適切に供給しなければならんという必要性を再認識することはもちろん、ドラマで描かれる公務員の見苦しい姿も注目するべきであると思いました。同時に公務員に対する認識は日本と韓国が似ているという自嘲的な考えも頭をかすめました。

一方、次に思ったのは金融面だけでなく、社会全般的な現象になった「倍返し」という表現に対する考えです。ドラマで描かれる「倍返し」のイメージとしては、苦痛を経験しながら相手に怒りをぶちまけ、自分の信念を実現する正義に関することですが、このような「やられたらやり返す」ということが、ひょつとすると、外国との関係にも影響を及ぼしているかもしれないという懸念です。もちろんこのような懸念は、考えすぎかもしれませんが。しかし、アジアの領土や歴史認識をめぐ

った暴動・デモなどをみて、固定された社会構造で個人の満足度はますます低下し、これが出口のない怒りになって大きく拡散するのではないかと心配しています。日本と韓国の両国が、お互いに両極端に突き進んでいる一方で、韓国の朴槿恵大統領の就任以降、日本と韓国の両国首脳会談はまだ開かれていない状況です。幸いなことに、三月二十五日には日米韓三ヶ国の首脳会談が開かれて、北東アジアの平和構築の議論がされる予定です。しかし、会談は北朝鮮の核から始まって、北朝鮮の核に終了し、歴史認識問題という両国の葛藤の核心は残ったままです。日本と韓国の両国の首脳会談に続くのかはまだ分からない状況です。

「倍返し」という言葉がそもそも悪い意味か、良い意味を込めているのかについては、外国人である私にはまだわかりません。そんな中、去年のある日、京都の三条通を歩くと、旅行会社HISが顧客に与える千円割引クーポン券を抽選で二倍ないし、十倍に増やす「倍返しキャンペーン」をしているところを見ました。もちろん、応募してみたかったのですが、せっかく日本に留学に来たので世界旅行よりも日本旅行をしようと思い、断念しました。しかし、そこでふっと思ったのは、

「倍返し」は怒りの方向ではなく、善意の方向にも返すこともできるのではないかということです。

日本の多くの企業が顧客に対して行っている「倍返しキャンペーン」のように金融も社会的貢献をすることはできないのでしょうか。一例として、マイクロクレジット金融の場合、社会的企業としてのNGO型マイクロクレジットと利潤追求型マイクロファイナンスがあります。銀行などの金融部門は、そもそも市場の領域に属しており、利潤を追求することが当然になっていますが、金融の影響が力や繰り返し起こる金融危機などの時に国家の税金で救済されることを考えてみると、金融機関の活動は、もう一部の企業のものではないと言えます。金融の力で私たちの暮らしを支えることで、十分に公共的な役割も担っていると思います。持続可能な金融の新たな姿を模索している中で、金融業界にも善意の倍返しというような、利益追求だけでなく、社会的な貢献が今後より一層求められてくるのではないかと思います。

最後に、公務員や公共的な立場からはもちろん、隣接国家の国民としても望むのは、日本が韓国に、韓国が日本に「善意の倍返しキャンペーン」を展開することです。お互いに

相手が先に動くことを待っていることでは道は開きません。自分の国のことだけを考えるのではなく、相手の国を想い行動し、善意をお互いに振りまいていくことを望んでいます。まもなく、日本の留学生生活も二年目になり、残りの一年の学生期間も楽しみにしています。日本に來なかつたら分からなかつたことを沢山学んでいる大切な時間ですし、何よりも善意の倍返しのために学ぶことが沢山あるからです。

### 柳 恩智

ユウ・オンジ

京大公共政策大学院8期生・社会人留学生。韓国の金融委員会に務め、2年間、本大学院に出向中。金融政策を専攻し、金融の公共的な役割について研究を深めている他、国際法・国際行政制度などの国際的なルール作りについても新たに学んでいる。好きな日本ドラマは「半沢直樹」。